



## 先天性風しん症候群を防ぐために

母子手帳には妊娠中に検査をした風疹の抗体価の記載があるはずですが。妊婦健診のときに「妊婦が風しんに罹患すると、胎児が先天性風しん症候群という病気になって、目が見えない、耳が聞こえない、心臓に障害のある子どもが生まれる危険性がある。」という話を聞いたことがあるでしょう。

風疹は俗に三日麻疹(みっかばしか)とも言われます。本物の麻疹(はしか)が1週間程度症状が続く重い病気であるのに対して、風疹は三日程度で症状が治まる軽い病気と思われていますが、妊婦に対しては影響が大きい病気です。しかし、実は妊婦がどれだけ気をつけても、妊娠に気がついてからの予防は不可能なのです。

先天性風しん症候群は妊娠初期ほど発症しやすく、妊娠5週では50%と言われています。女性の方はわかると思いますが、妊娠週数の数え方は最終月経の初日からです。妊娠1週はまだ受精もしていません。妊娠5週とは「生理が1週間遅れている、もしかしたら妊娠かもしれない」と気がつく時期です。この時期に風疹に罹患すると50%の胎児は病気になります。

また、抗体があるから大丈夫とは言いきれません。「抗体がある」のは血液検査をした日のことであり、それから何年かすると抗体は弱くなります。またそれなりに抗体が高い人であっても、抗体の効果で母親本人は発熱や麻疹に気がつかない程度の不顕性感染となりますが、母親の身近な人から風疹をうつされると身体に入るウイルス量も多く、抗体の攻撃をすり抜けた風疹ウイルスが受精卵に到達してしまえば、胎児だけが発症することも知られています。その身近な人とは、夫や職場の同僚のことです。

2022年3月31日までの間に限り、1962年4月2日から1979年4月1日までの間に生まれた男性(40歳から57歳の男性)が風しんワクチンの予防接種の対象者となりました。市町村から郵送されるクーポン券を利用すれば、居住する市に限らず、全国のどの地域の医療機関においても無料で抗体検査・予防接種を受けることができます。職場の近くでも接種が可能です。崎山小児科でも受け付けています。

妻と職場の女性を守るために、対象年齢の男性はぜひ検査ならびに予防接種を受けて下さい。無関心な男性が疫病神になる危険性をご理解下さい。

## 声の出る仕組み



人間は「声を出そう」という脳からの指令で、まず肺は呼吸(口や鼻から吐く息)を作ります。呼吸は次に、気管を通りそのてっぺんの喉頭にきます。その先に声帯があります。左右の声帯は、普段は呼吸のために開いていますが、声を出すときは脳からの指令でピタッと真ん中で合わさります。声を出しているときの声帯を内視鏡で見るとただ閉じているだけに見えますが、このとき声帯は目に見えない速度で左右対称に振動しています。左右の声帯が肺からの空気でもち上げられて呼吸が排出されます。この声帯の開閉が1秒間に何百回も起こり、音が発生されます。この音はブーとかピーという振動の音で音色がまだ加わっていません。男性では1秒間に100~150回、女性では同様に200~300回振動させて音を作ります。ギターの弦の細い方が高音が出るのと同様に、男性の方が声帯が太いため低い音が出ると考えられます。このため、一般的に男性は女性より低い声になります。

強風のとき古くなった窓のすきまからピーッと音が出ますが、窓をあければ風は入るけれども音は消えます。これと同じで、声帯がしっかり閉じない状態(声門閉鎖不全)では声帯振動が起こりにくく、息の漏れた、ささやくような声になります。つまり、嚙声(声がれ)は声帯の振動の異常です。声帯の振動により音になった呼吸は最後に咽頭や鼻、口腔、口唇で音色を加えて声として発声されます。言語音となって出された言葉は話し相手に伝わりますが、同時に自分の耳に入り、脳に伝わり(フィードバック)、脳で声の大きさ、高さなどを調整しながら会話をします。この音は必ずしも自分の耳を通らなくても骨の振動として直接自分の聴覚器官に入ります。録音した自分の声が自分の思っていた声と違うのはそのためです。

成長とともに、声帯も変化し、声や話し方も変わってきます。今ある声がいつか変わってしまうかもしれないと思うと、親としてはさみしさも感じますが、成長をうれしくも思います。

いろいろな変化や成長を楽しみながら、日々過ごしていけたらいいですね。



**崎山先生の当番日** 『府中市民保健センター』

**5/2(木) 休日診療(9:00~11:30/13:00~16:00)**

**5/3(金) 夜間診療(19:30~22:00)**

